

長期連載論文

第8回

# 文明の輪廻転生

—アトランティス異聞—

第七章 魔女と神話

その1

会長 渡辺豊和

## エジプト女王のアトラ ンティスへの遣使

話は少し飛ぶがBC二〇〇〇年からBC一五〇〇年までの五〇〇年間世界は大混乱時代にあたっていた。エジプトではBC一七三〇年頃にナイルデルタの東北からアジア系民族ヒクソスが侵入し、下エジプトを支配してしまった。これを撃退しエジプト人による統一王朝が出現するのがBC一五七〇年代であるから二〇〇年以上北部の下エジプトはヒクソスの手にあった。現在のトルコ、アナトリアは世界最古の都市チャタルフックのあったところでありチャタルフックをつくった原ハッティが北から侵入したヒッタイトに追わ

れ姿を消してしまうのがBC二〇〇〇年頃である。ヨーロッパではフランス、ブルターニュ地方のカルナックの直列遺跡やイギリスのストーンヘンジを建造した民族が突如目立った活動を停止してしまうのもBC二〇〇〇年頃のことである。この民族はケルト族であろうか。ケルトはフランス、イギリス、スペインあたりに紀元前後に居住していたことは確かであるから姿を消したわけではないが彼等の身の上は何事か文化活動を停止させる事件がふりかかって来たのであろう。日本では一五〇〇年の長期に亘って繁栄した三内丸山人が突然姿を消してしまうのもBC二〇〇〇年頃のことである。インドでも西北インドに北方の蛮族、アリア人が侵入し、インダス人が駆逐されはじめるのがBC二〇〇〇年であり五〇〇年後にはさしもの繁栄をほしいままにしたハラッパー、モヘンジョダロのインダス文

明も消え去ってしまう。

ヒクソスを撃退したエジプトは第一八王朝の繁栄を迎えるのであるがトトメス一世（在位BC一五一〇年前後）は領土拡大を計り南は現在のスーダン北部、北はメソポタミアのユーフラテス河上流まで遠征した。エジプトはヒクソス撃退後トトメス一世までの五〇年以上外征をくり返したが次のトトメス二世（在位BC一四九五〜九〇年）は病弱で王妃のハトシェプスト（トトメス一世の娘でトトメス二世の異母兄弟）が夫の死後王となりエジプトの唯一の女王として君臨するが彼女は外征をやめ、平和外交と神殿の造営修築に力を注いだ。この女王はそれまで遙か東の彼方の大海に浮ぶ楽園と思われていたプント（プラトンのいうアトランティス）と交易するため船団を派遣する。五艘の帆船をひきいたのは財務長官ネフシである。船の長さは七〇キューピット

というから三五メートルほど、漕ぎ手は三〇人であった。ハトシェプストは女性だったために男性とは違い闘争を好まず前代の王達が盛んにした外国侵略を止め、平和を望んだと考えるのは早計である。彼女は男性用の衣裳をまといファラオ（王）の伝統である付けひげまでをしたというから権力的野心の旺盛な女性であり多分高度の魔術を駆使する魔女であったろう。エジプトは魔術の国でありファラオ（王）は最高の魔術師でもあったから女王ハトシェプストの魔術的能力も凄まじかったはずである。勿論エジプトでは魔術がそのまま超越的霊能力をさしたのはいまでもない。エジプト魔術では死者の蘇生、後にユダヤ人の指導者モーゼがしてみせた海水を左右に分し海底を歩いて渡ることができ、海水の自在な操作、単なる物質を好みの動物に変え、戦力とすること。たとえば杖を蛇にしてしま

いその蛇が敵を攻撃して死にいたらしめる術などよく知られている。『旧約聖書』で有名な「出エジプト」で発揮したモーゼの魔術もエジプトで習得したものであった。魔術の国エジプトの最高の魔女でもあるハトシェプストが楽園プントに派遣した使節は単なる貿易のためだけではなかったはずである。プント、即ちアトランティスはその当時から八〇〇〇年前に海没したといえ現在のインドネシアのスラウエシ島には海没をまぬがれた大部分の大地が残っていてそこにかつては世界に散らばっていたアトランティス遺民が戻っていて一大魔術センターをつくっていた気配が濃厚である。これの現在まで継続している遺風とみられるのがスラウエシの先住高地民ママサの死者を蘇らせる魔術である。ハトシェプストはこの魔術センターの存在を知りそこにある密命をおびさせて使節を派遣したと想定し

たらこれ以後の世界はどう展開したことになるのか。古代史や神話伝説を参照しながら地球医療や夢通信の検証をここからはじめてみたい。

## 使節の密命

それならばその密命とは何だったのか。それを探る前に知っておかなければならないことがある。エジプトの魔術師は死者が冥界に行ってもその冥界が楽園であってそこで幸福に生活出来るように種々様々の術をほどこすことを主たる任務としていたから一種の冥界への案内人でもあった。後世の僧を想像してもらえばいいであろう。事実魔術師は神官でもあった。

エジプト人にとって冥界は単なる空想の世界ではない。この世のどこかに実在する謎の楽園であった。プントこそその楽園であったのではないか。ここに実際に渡海することが出来るのなら人はそこで永遠に楽しく生きられるに違いない。ハトシェプストはそう考えたであろう。

死者があゝの世の楽園での永生を願って死者に巻き付けた文書『死者の書』には「平和の原（楽園）」への定期船ラア神の太陽船に無事乗ることが出来よと願う呪文がある。ハトシェプストは自ら太陽船を仕立てまずは楽園に使節を派遣した可能性は充分にある。彼女にとって外洋の楽園が永生を約束してくれるのは当然であった。但しそのためにはこの地上即ち地球全体の構成が問題である。というよりもエジプトの魔術は死者に対してどこにされるものであり『死者の書』に記されている内容からす

れば死体のすみずみまでがバラバラに分解されて意識されていてまるで人体が世界全体に見立てられ身体が各部分が数多くの国々にみなされている。葬るとき人体をバラバラにするわけではないにしても内臓を一つ一つ抜き取り別々の容器に入れ手、足、頭、首の各部分にはそれぞれ違つた護符を置く。

まるで死者の身体を世界地図とみている。実はこれがアトランティス文明が残した世界認識でもあった。地球は人体とみなされ個々の人体はそれぞれ地球とみなされて世界が成立していたのである。エジプトはそのアトランティス文明を最も忠実に継承していた。一人の死者の永生は世界の永久繁栄と直結していたというわけである。当然ハトシェプストも自身の永生を夢見た。生存中に自分を葬ることになる壮大な葬祭殿を建設したとその建設担当大臣がセンムトであった。彼は女王の永遠の生命に

あやかろうと思ひこの建物の目立たない所、数カ所に自分の肖像をはめ込んでおいた。しかし彼の死後それが露見してしまった。ハトシェプストは怒りその肖像をほとんど探し出し、削り取らせ彼の棺をメチャメチャに破砕させてしまった。ともあれ地球は人体に見立てられていてアトランティス時代には世界全体を一〇ヶ所に等分割しそれぞれ一〇人の王が統治していた。ハトシェプストはそのことをよく知っていたはずである。地球は正一四面体状に結晶をなしており世界は南北両極を除外して正五角形一〇個に分割されそれぞれの地域は身体の部分と各内臓の役割を分担していた。(図5-6、図5-7)このことは中国の漢方医学と古代地理学風水術として遺存している。

さて本題に戻るがハトシェプストが頭を痛めていたのは何も自分の永生を叶えようとして工夫

が充分に出来ていなかったことだけではあるまい。彼女は世界の盟主として世界平和を希求していたのに彼女の時代までヨーロッパ、インダス、アナトリア、日本などが五〇〇年前の混乱から立ち直っていないなかった。そのせいで全世界にはり巡らされていた夢通信網がうまく機能していなかった。(図5-7)を見てもわかるが夢通信装置、巨石建造物が密集する場所、ヨーロッパでは大西洋をはさんだイギリスの南イングランドとフランスのブルターニュ、エジプトのギザ、インダス河流域、トルコのアナトリア、日本本州、マヤのメキシコ、インカのペルーなど全て地球結晶の稜線上にある。夢通信網はこの稜線上幅一〇〇キロに展開し所によつては袋状になつて広がっていた。それなのにエジプト以外の夢通信センターは混乱のさなかにあった。これをどうして修築するか。プントに集まつた各地域の魔術師

達と協議することが遣使の密命であつたと考えてみたい。各地域から魔術師が集まっていたのは蛮族の侵入の混乱を避けてそれぞれが先祖の故地に帰っていたからである。彼らは夢通信の技術者でもあつた。夢通信が十全に機能しない限りハトシエプストの永生の望みも叶えられない。如何に彼女が強力異常な魔女であつたにしてもである。彼女の遣使の表の代表者は財務長官ネフシであるが男装したというよりも男性に化けた魔女五人が遣使の中に紛れ込んでいて彼女達が密命をおび、この地に残つたとしたらどうであろうか。ハトシエプスト葬祭殿の内部壁面には遣使を迎えるプント王。ペレフの姿が描かれている。ペレフとともに描かれた妻の姿はひどい皮膚病でもわずらっているのではないかと思われるぐらい不様な姿をしているがこの女こそこの世の冥界を支配する魔女だつたのではないか。

あの壁面のレリーフはそのことを暗示しているに違いない。

## 魔女の配置

古代の世界四大文明といえばナイル川沿岸のエジプト、チグリス、ユーフラテスの両河には生まれたメソポタミア、インダス河流域のインダスと黄河流域の中国である。しかしエジプト、メソポタミア、インダスは全てBC二五〇〇年には高度な段階に達していたのに中国のみはBC一五〇〇年になってようやく殷が姿をあらわし高度文明の仲間入りを果すが他の三文明からは一〇〇〇年以上も遅れている。このことがプントにおける魔術会議と深く関わっていた。この

魔術会議は夢通信網の再整備が最大の問題であり、そのためには夢通信装置である巨石建造物の修築と夢通信技術者即ち魔術師の育成が必須の課題であつた。夢通信網が最も稠密にはり巡らされているのは日本列島であつたが台湾も含め日本列島は全世界のひな型、模範とみなされていてすでにのべたが本州がユーラシア、九州がアフリカ、四国がオーストラリア、北海道が北アメリカ、台湾が南アメリカに相当していた。また日本の夢通信センターである三輪山（奈良県中部の聖山）とエジプトのギザ、サッカーとは不離不即ともいえる密接な関係にあつた。その日本が三内丸山の衰退後エジプトとの夢通信が途絶えがちであつたから日本の夢通信装置網の再整備こそが他の地域よりも緊急を要していた。日本の不整備地区、たとえばそれが四国の南部だつたとしたらオーストラリア大陸の南部一

帯の不備をまねくのであつた。この当時とくに不整備が目立つたのは関東地方だつた可能性が高い。というのも関東地方全体にあたる中国にこのときまでに夢通信網が稠密にはりめぐらされていた気配がない。中国の神話に夢通信を感じさせるものがないからである。このことは他の三大文明の神話と比較してみると一目瞭然であるがいまここでは立ち入らない。この会議で決定したのは日本列島の再整備はもちろん、中国にも夢通信網をはりめぐらすことであつた。まず五人のうち最強力の魔女が日本に派遣されることになつた。この時プントに集結していた三内丸山人の代表がそれをつれて日本に行くのであるが彼らの主眼は中国にあつた。小国日本の再整備はそれほど難しいことではなかつたからである。二人は日本の仕事を終えてただちに中国に向かい山東半島に到着した。というのも黄河の河

口に近い現在の山東省済南の龍山に日本系の人々が縄文文化によく似た文化を展開していたからである。彼らはこの龍山人に夢通信網の設置を期待した。

中国ではBC一五〇〇年頃に成立した殷王朝は鼎などの特異な青銅器を特徴とする高度文明を開始する。殷後期の都ではなかったかとされる殷墟は龍山から二〇〇キロ西南にある。広大な中国にあっては二〇〇キロは至近距離であり考古学の通説では殷は龍山文化から発展したといわれている。それでも龍山時代には青銅器は全く見られないのに殷に至って突然使用されはじめる。この青銅器の技術はどこからもたらされたものか不明らしい。それもそのはずである。殷文化を発生させたのはエジプトの魔女と日本人であった。青銅器の技術はエジプトの魔女が伝えたのだからわからないはずである。もちろん彼らは夢通信網も設置し

たのはいうまでもない

殷人は後の王朝の主となった周人から東夷、南夷の種族といわれた。文身（いれずみ）をしたのであるから有名な『魏志倭人伝』の卑弥呼達の日本人も文身し海に潜って魚貝をとったが、これは縄文時代からの日本人や太平洋沿海諸民族の習俗であり、殷人は日本人と同系の文化から発生したのは間違いない事実である。中国の神話では蛇身人首の伏羲という男性と女媧という女性が初代王と二代目王であり女媧はコンパス、伏羲は定規をもって国土をつくりあげたとされている。二人が蛇身人首というのは彼らがプトからやってきたことを示している。エジプトでは理想の楽園の王は龍（または蛇）身人首とされていた。日本ではここは龍宮であり王の娘乙姫も龍身人首であった。伏羲と女媧は夢通信網を設置するためには精密な国土測量、高度な設計術が必

要であったはずである。定規とコンパスは製図用具であるからそのための道具であった。この伏羲と女媧こそ中国に渡った三内丸山人とエジプトの魔女だったのはわざわざ断るまでもあるまい。この一組の男女は夫婦であったとは中国神話ではなっていない。当然である。三内丸山人は龍宮の乙姫を妻としていて魔女とは夫婦であるはずがない。さて二人は龍山のすぐ近くにそびえる泰山を聖山と定め中国の夢通信ネットワークのセンターとした。ここで夢通信を開始した。このことが中国神話では伏羲が天を祀る封（ふう）を行ったとなつていて。この二人は中国で充分満足出来る成果をあげた後、

ヨーロッパに渡りイギリスとフランスの巨石建造物の修築を行い再び日本にやってきて現在の高知県足摺岬でこの地の夢通信網を再整備した。後述するが日本はポストアトランティス文明の世界夢通信

システム中では中国や日本などの東アジア地域と西ヨーロッパ、北西アフリカ地域をコントロールする役割があつたのは前にのべた（図5-6、図5-7）。この任務もあらかじめプトでの魔術会議で決定済みであった。

ちなみに香川県大川郡志度町には巨石にまつわる次の伝説がある。志度町の阿麻野峠に動石という巨石がある。玉取海女（たまとりあま）が龍宮から美しい宝玉を取り返してきた時にこの石に腰をかけた。この石は不思議なことに善人が腰をかけると動き、悪人だと少しも動かない。志度に海女の墓といわれるものが残っている。龍宮とはプトのことであり、ここから宝玉を取り返した海女とはエジプトの魔女のことであろう。それでは三内丸山人の方の消息はないであろうか。こちらは高知県高岡郡仁淀村にあつた。ある年の暮れに一人の貧しい遍路がやってきて

村一番の金持ちに宿を頼んだが断られ、隣の家に泊めてもらった。

翌元日の朝この家の主人が隣の家に行こうと思つていと泊まっている遍路が「これで顔や手足を拭いてくれ。」と一枚の手拭をくれた。いわれるとおりにすると年とつた顔がたちまち若返つて手足ものびのびした。その姿で隣家に挨拶にいったら金持ちは驚いてそのわけを聞いた。その事の次第を語ると自分達夫婦も若返りたいと遍路に頼む。結果はお決まりどおり失敗し逆に猿の姿にさせられてしまう。この伝説は遍路の話であるからそれ程古くないと思われようがそんなことはない。龍宮とはプリントのことであるからこれは遙かに古い時代のことである。又若返りの魔術をもっているのはプリントで習得しなければありえないからこの「遍路」は三内丸山人だった。邪悪な隣人夫婦を猿に変えたのも同じプリント渡りの魔

術だった。

## 中国の役割

伏犠と女媧は中国に夢通信網を設置したのには理由があつた。地球人体図(図5-7)でもわかるのだが日本は心臓(火)の役割を担っているから世界を再生させるためにこの心臓を死体から取り出し秤にかけて羽根よりも軽いのか重いのか計らなければならぬ。もし軽ければ再生は可能なのだが重いとすると再生はできず世界は永久に暗黒に沈んだままとなる。世界には心臓を計る秤が必要でありこの秤によつて心臓の軽重を計り、それによつて死者の生前の罪の有無を審判するのである。『死者の

書』ではこの審判が冥界での最重要行事であることが強調されている。冥界ならぬこの世では審判の役割を担つていたのはメソポタミアであつた。メソポタミアではB

C一七九二年に有名なハムラビ法典がつくられるがこの法典に代表されるこの文明は法律によつて人々の日常生活を導き公正に裁くことをむねとしていた。それがB C二〇〇〇年頃にこの文明も北方の蛮族に荒され極度に衰退していった。ハムラビ法典はこの衰退からメソポタミアを救うためにつくられたといつてもいい。ハムラビ王の努力にもかかわらずメソポタミアはこの王の死後また混乱時代に入りハトシェプスト女王の時代には見る影もなく衰え果てていった。ハトシェプストにとつては自分が永生するためには審判の役割を担う場所を何処かに急遽つくつておく必要があつた。心臓である日本を再整備するとともにそのすぐ西

の中国に新たに審判国を伏犠と女媧につくらせた。

人々が稠密に集まつて生活をする都市ではどうしても人々のエゴがぶつかりあい争いがたえない。それを秩序だてるためには絶大な独裁王権が必要となるのだがメソポタミアではそんな王権は発達せず人々が争わないよう法律によつて人々の生活に規律を求めた。要は市民平等が生み出したこの文明の知恵であつた。というよりもこの文明は裁きを担うためにアトランティス遺民によつてつくられていたのである。それ故メソポタミアにはウルクなどの都市が発達したともいえる。

ところがメソポタミアに代わつてつくられる中国文明は法律ではなく科学を得意にさせよと伏犠と女は命じられていた。法律は人間達の争いを裁くためのものでありこれでは理想社会をおさめることはできない。人間の身体を永久に

健康にしておくことのできる医学などの科学によって心臓の働きの善し悪しを計るのならば生々しいこの世の諍いをあの世に持ち込むこともあるまいとハトシエプストは考えた。それに彼女に伝えられていたアトランティス文明も医学などの科学によって人々に健康を保たさせ平和な生活を約束していたのであって彼女はそのことをよく知っていた。彼女はプント、即ちかつてのアトランティスとの交流によってアトランティス知識を派遣した魔女達に学ばさせ更に世界各地に彼女達を散らせてこの世に再び理想社会をつくりだそうとした。

メソポタミアは審判者即ち法律家を育てた文明であったが中国には精密機械に似た正確無比の「秤」をつくる科学を発達させるとした。いくら優秀な審判者を育てても「秤」が不良品ではどうしようもないというわけである。この中国

がいかに科学の文明でありしかもメソポタミアやエジプトとは違いアトランティス遺民によって直接つくられていない新進の文明であることは洪水伝説に如実にあらわれている。アトランティス遺民による洪水伝説は『旧約聖書』の「ノアの方舟」伝説に近く大陸や大きな島が海没する物語である。即ちこれはアトランティスの海没の記憶を伝えているのである。ところが中国は違う。

中国に大洪水が起こって人々は苦しんだので、天帝は鯀（コン）という者に洪水をおさめよと命じた。鯀はかたくなで人々のいうことを聞かずそのため九年間働いても何の成果も得られなかった。トビや亀のいうことを聞いて水をひかせることにしたがそれにも失敗してしまった。時の帝堯（ギョウ）は鯀の罪を責めて羽山に追放してしまった。ところが鯀の子の禹（ウ）は優秀で巧みに山を開き運

河を掘って水流を変え洪水をひかせてしまった。この禹こそ中国最初の王朝夏（か）の初代皇帝である。但し夏は伝説の王朝でありいまでもその実在はわかっていない。この伝説は禹の科学技術の勝利をたたえているがアトランティス海没の記憶とは何のかわりもないことは納得できるであろう。それでは中国に持ち込まれた科学とはどんなものであったのか。いうまでもないが漢法医学と風水術、易占である。

## 死者の書の秘密

『死者の書』は死者の来世の幸福を願う呪文なのだが内容は子供騙しの絵本である。基本は死者の

この世への復活と「平和の原」への無事な航海、到着後のそこでの平安な生活ということである。しかし『死者の書』そのものは全て現世の比喩であって高度な科学技術を駆使したエジプト人が子供騙しの絵本をそのまま信じたはずはない。人体はそのまま地球であるのだからミイラに関する叙述も地球魔術とみなさなければならぬ。死者は例外なくミイラとされそのミイラに魂をいれるために口を開く儀式のことが書かれている。これも一度は死んだ地球に魂を入れる方法が述べられているとみなければならぬ。この記述には死んだ地球というよりもこの場合は、夢通信ネットワークが随所で破綻した瀕死の地球に魂を入れて健康体にする方法が隠されている。それでは地球の口とは何処のことなのか。これを知るためにはアトランティス発見の道筋を説明するしかない。アトランティスのことは

プラトンが晩年に書いた「ティマイオス」と「クリティアス」にありこれからはアトランティス平野とその平野南端、海に面してあったアトランティス市と中心市街地の三図形が引きだせる。このうちアトランティス市が重要でありそれは円形の都市であるが市を二分して運河が流れ円の中心に運河に串刺しになって円形の中心市街がある(図1-4、図1-5)。「ティマイオス」は宇宙、地球、人間を書いた本でありその極く一部にアトランティスが触れられていて詳しいことは「クリティアス」にある。この二冊の本の構成からしてアトランティス三図形はそのまま世界図でもあると考えられる。アトランティスは地球全体のことでもあり運河は赤道を示してもいるとなるとアトランティス中心市街こそ一夜で海没したアトランティス島のことであるに違いなくそれは赤道上に位置していたことにな

る。それでは赤道上の何処なのか。これさえわかればアトランティス島の位置は確定できる。ところがアトランティスのことはエジプトの神官が語ったことでありプラトンは地名も人名も全てギリシヤ名に変えてしまったという。エジプト中心の話ギリシヤ中心に変えてしまったのである。大西洋にアトランティスはあったとなつているがエジプト人には大西洋は縁のない海、これは明らかに太平洋のことである。エジプト、ギザの三大ピラミッドは古代エジプト人にとつても古来からのエジプト文明の象徴であることからすればアトランティス市の外郭円形はギザを通る経線(子午線)を北極、南極を通つて地球一周させた線をあらわしていると考えていい。こうして浮かび上がってきたのはインドネシアのスラウエシ島だったというわけである。第二ピラミッド、カフラー王ピラミッドの東に河岸

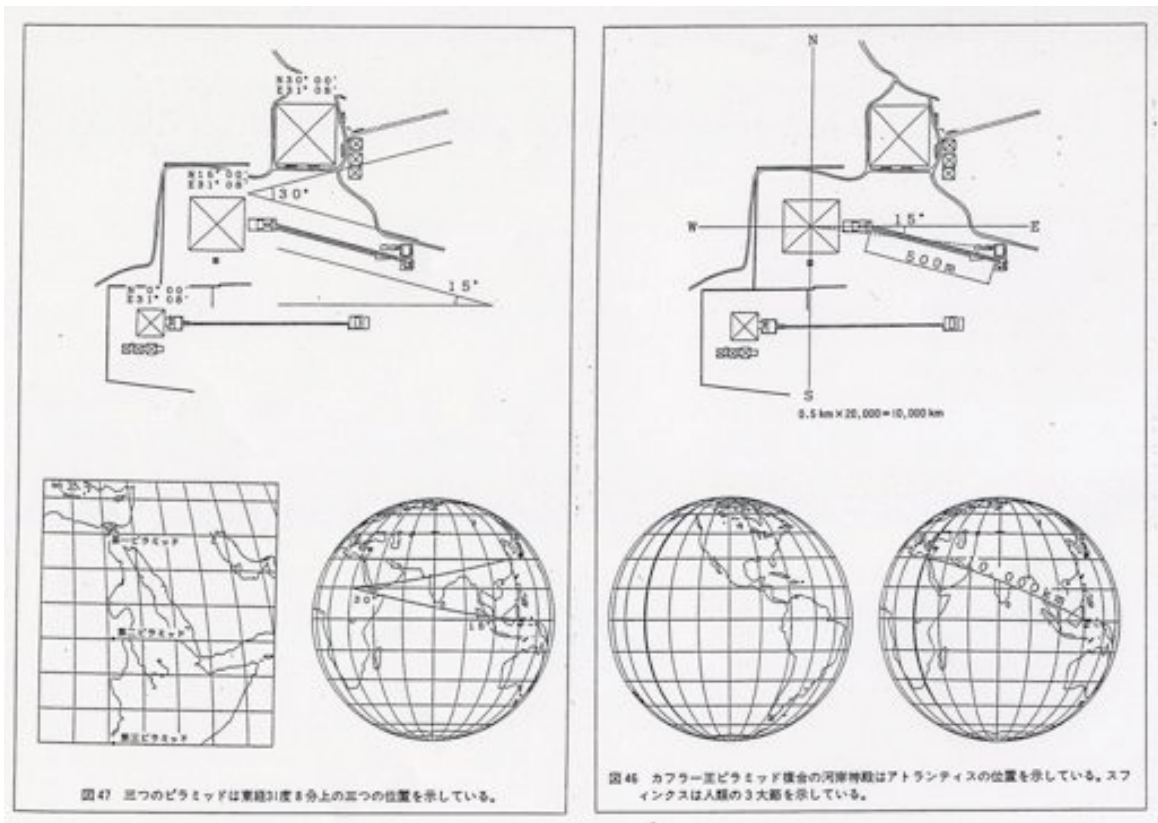


図7-1 三大ピラミッドの謎



神殿に向う参道がありこれが緯度に対して南に一五度傾いている(図7-1)。この参道の方向はアトランティスの方向を示しているのだがギザは北緯三〇度であつて一五度ではない。このことからしてかつてアトランティス遺民がエジプトに到着して最初に文化を築いたのはギザの真南で北緯一五度の場所だつたと考えられる。現在のスーダン・ハルツーム市のすぐ西にあたる。その証拠にハトシェプストよりも後代のアメンホテプ三世のときに作った水時計は北緯一五度用のものでありエジプト滅亡までこの方式のものが使用されたという。アトランティス(プト、スラウエシ)はギザの真南で北緯一五度の位置からすれば東南一五度の方向にある。これはこの地からすれば冬至と春分又は秋分の日との丁度中間の日、二月六日と十一月六日の日の出の方向なのである。エジプト魔女の系譜をひ

いているといわれるケルトの魔女も二至二分の日よりもその中間の日のサバトを重視したというからエジプト魔術にとつてこの中間の日の日の出の方向東南一五度が重要であつてアトランティス(プト、スラウエシ)はこの日に太陽が地上に飛び出してくる世界の飛び出し口だつた。スラウエシの裏(スラウエシから真東に一八〇度の位置)はブラジル北西部にあるがここは同じ日の日没の方向に入りここから太陽は地下の冥界に入つて翌日にはスラウエシから飛び出て来る。エジプト人にとつてはここが世界の肛門だつた。死者の書でミイラの口を開き魂を入れ復活を計るとあるのはスラウエシで魔術会議を開き世界の夢通信網を整備することを意味した。エジプト人にとつては他の中間の日夏至と二分の中間の日、五月六日と八月七日の日没の方向が整備されていないのが気がかりであつた。そ

れはスラウエシの真北北緯三〇度の場所である。即ち中国上海市南の杭州市にあたる。エジプトの魔女と三内丸山人が中国に派遣され伏犠と女媧といわれたのもこの理由による。杭州の真東一八〇度は大西洋バミューダ諸島の南でありこれはエジプト人の故郷(ハルツーム市近傍)からは夏至と二分の日の中間日、五月六日と八月七日の日没の方向である。ここは海上であるから整備されたことはないであろうが「魔の三角形」といわれ飛行機が墜落する場所として恐れられているのもエジプト魔術のなせる仕業なのだろうか。『死者の書』ではミイラの口を開いた後は冥界ではさつそく生前の善悪を裁く法廷で事前に体内から取り出してあつた心臓の重さを計るが秤にかけて羽根よりも重いと彼は「平和の原」に行けなくなつてしまふ。そうはならないための呪文が記されている。このことは地球の心臓

が重大なことを示唆している。地球の心臓は日本でありかつ世界のひな型でもあるからここの不整備は全世界の平和即ち地球の生命にかかわってくる。三内丸山人とエジプト魔女が最後日本に住んでこの整備につくしたのはこんな理由だつたのである。

### 三内丸山人の故郷

中国では伏犠といわれた三内丸山人の先祖が彼の時代よりも五〇〇年前に自分達の居住地を捨てて日本海沿岸を南下し、丹後半島に隠れ住んだのには深い理由がある。西のエジプトギザと並ぶ夢通信の世界センターである三輪山を守らなければならない事情がこの当時

急激に持ち上がっていた。西のセ  
ンター、エジプトが北方からの蛮  
族の侵略にさらされはじめ危険な  
状態になりつつあった。これはユ  
ーラシア大陸西部、現在のヨーロ  
ッパの内部で起こった民族移動が  
まるで将棋倒しよろしく連鎖反応  
をひきおこし、ついには巨大文明  
国エジプトにまでその累がおよん  
でいた。エジプトと三輪山の両セ  
ンターのどちらかが万全である限  
り世界の夢通信は混乱したり、麻  
痺状態に陥ることにはならない。  
三内丸山人の移動は三輪山を守る  
ために行われたのであるが当時は  
航海が最良の交通手段であったか  
ら現在の奈良県などの内陸部に大  
人数が同時に常時住むには不便だ  
ったし、またこの地方は縄文時代  
には未開の場所だった。但し世界  
規模の地理的理由から三輪山に夢  
通信センターが設置されていてこ  
れを管理運営する人々は常時居住  
してはいたが平時には少数の人で

こと足りていた。しかしエジプト  
の危機を知って何かの時の用意に  
丹後半島まで移動してきたという  
わけである。彼らが後髪をひかれ  
る思いで残してきた都市「三内丸  
山」は五〇〇人を超す人口であり  
食糧は奥陸湾でとれる豊富な魚貝、  
更には町を取り巻く栗林からとれ  
る栗の実にも恵まれ何不自由のな  
い暮らしをしていた。栗林も彼ら  
が植えたものであり群がる家々は  
前方後円墳に似た土饅頭型であり  
床は大地より一メートル低く掘ら  
れていた。屋根はシツクイが塗ら  
れ秋田県横手の雪室「カマクラ」  
を思わせ白く日の光を反射し、ピ  
カピカ輝いていた。竹や蔓を編ん  
で繊細精妙な細工の箆やポシェッ  
トをつくったり陶器、更にはうす  
く軽い木製の椀など日常用具をつ  
くる専門の職人もおりそれを売り  
さばく商人もいた。神殿は高さ二  
〇メートルをこえる高樓であり、  
それを支える六本の円柱は直径一

メートル以上の栗材であった。勿  
論これは見事に製材されていた。  
この高樓に至る一列の小神殿群は  
高床校倉造りであり、神殿群は貝  
や動物の骨を踏み固めてつくられ  
た高さ三メートルもある二つのプ  
ラットホームで両側ははさまれて  
いた。このプラットホームでは祭  
りの時夜通しかがり火が焚かれあ  
かかかと夜空を照らし、人々は踊  
り狂うのであった。彼らは決して  
他人と争わず他部族と戦争などし  
たこともなく一五〇〇年もの気の  
遠くなる長大な時間、先祖代々戦  
争を知らなかった。要は掠奪など  
起こらないほど縄文日本は富んで  
いた。人々は子供をことさら大事  
にし、死んだ子供はかめに入れて  
手厚く葬ったが大人は土孔にその  
まま葬るだけだった。

彼らの日常は天を恐れそして崇  
め平和を樂しみ子供を大切にす  
る生活だった。食糧不足の不安など  
まるでなく、まるで毎日樂園に住  
んでいるに似ていた。その生活を  
伏儀の先祖達はやもえない事情が  
あったとはいえ捨ててきたのであ  
る。もちろん三内丸山の外部には  
神殿もある。都市の南一〇キロ(小  
牧野)のところ三段の同心円構  
成をなす円形劇場とその真東一キ  
ロほどのところに高さ五〇メー  
ルの二上山状鞍型山容の雲谷峠  
(モヤトウゲ)と呼ぶ人工造山(ピ  
ラミッド)がある。雲谷峠の鞍型  
のひっこみから春分と秋分の日の  
夜明け太陽が飛び出して来るのが  
円形劇場から眺めることができた。  
円形劇場と雲谷峠は一对で神殿と  
なっていたということである。都  
市の周囲にはこの雲谷峠だけでは  
なく数多くの人工造山がありこれ  
はこの都市の中心神殿ストーンサー  
クルから見えて冬至、夏至の日の出、  
日没方向に正確につくられていた。  
これは現在では西南は鷹森山、東  
南は柴森山(円錐台形の明らかな  
人工造山)西北は田沢森と呼ばれ

ている。森山とは盛山のことであり青森県の人々は何千年も人工造山の記憶を保存してきたのである。小牧野の円形劇場からも夢通信網の人工造山が見え、冬至線上の西南は都谷森、東北は檜本森山と呼ばれている。このことも前にのべた。

さてBC二〇〇〇年頃に三内丸山人はこぞつて丹後半島に移住したといったがこのことを伝えてるのが浦島太郎の伝説なのだ。七世紀のなかば頃に書かれた『丹後国風土記』にあるのが古い浦島伝説である。但し浦島太郎ではなく浦島子となっている。浦島子は丹後の人であり、この浜から龍宮にいったのはいうまでもない。筋は私達が知っている伝説とはほとんど変わらない。

浦島太郎がいった龍宮こそプントのことであり乙姫はエジプトの魔女ではなくプント王の姫だった。浦島太郎とされた三内丸山人は中

国では伏犠であり彼は中国に渡った後イギリス、フランス、に行き日本に帰り四国に立ち寄って仕事をし、最後に故郷の丹後に戻ってきた時三〇〇年の月日が流れていた。三〇〇年とは長寿すぎるが伏犠も女媧も夢通信の特殊技術の専門家でありその技術を駆使すると脳の特異な部分を刺激し続けるため若さを保つことができた。夢通信の魔術師は不老不死の技術を身につけていたというわけである。伏犠は丹後半島をでた時一五才ぐらいであったが彼はプントで乙姫を妻として二五才ほどになった時エジプトから魔女女媧がやってきた。彼はこの時から夢通信の魔術師として任務を果しはじめこの年令を保ち続けたことになる。あと浦島太郎伝説のままである。玉手箱にはプントの秘術が込められた煙が入っていてこれを開くと彼の魔術の能力が失われるのだった。

## ケルトに伝える

伏犠と女媧は中国での任務を終えるとカルナックと南イギリスの南イングランド地方を訪れる。しかしここには直列巨石やストーンヘンジをつくり操作した人々は姿を消していて何処を探してもみあたらない。いたのは長身金髪ケルト族であり彼らは巨石を恐れただ崇めているだけでその意味は全く知らされていない。ただ二人はケルト民族は巨石に異常な興味を抱いているのを知って彼らに夢通信技術を伝えることにした。とはいえ二人は原ケルトともいえる巨石民族の行方を知らなかったわけではない。だいぶ荒れてはいた

がカルナックでも南イングランドでも巨石が働きを失っていたわけではなかった。通信してみれば先祖が五〇〇年程前に上エジプトの南、緯度一五度のハルツーム近くの彼らの故郷に引き上げていたことを知った。このことは世界センターのプントで知ることができはらずであったがカルナックや南イングランドの巨石装置が荒れていて中継機能を充分に果たせなくなっていてできなかった。こことハルツーム近傍とはかろうじて通信できた。原ケルトというか巨石民族は北アフリカからやって来た人々であることは巨石の近くに埋葬された人骨から研究が進みほぼ間違いのない。ケルトが原ケルトを追ったというのではない。ケルトがカルナックやウェルズにやって来た時は巨石民族は既に姿を消していた。ケルトは北からやって来た民族であり自分達は「死の国」からやって来たとも伝え

ているから彼らは北すなわち北歐を「死の国」とみなしていたのであろう。それよりも彼らが自分達を「死の国」の民族と自覚していることの方が重要なのだ。地球結晶図であきらかだがアトランティス一〇ヶ国に北極と南極の両地域は除外されている。この両地域は一〇ヶ国が光の領域であるのに闇の領域として定立されていた。これは「死者の書」に詳しく書かれているが後述に譲る。ただし光と闇が対立しているのではなく二つで一对となっているのは昼と夜で一日となるのと同じことである。北歐すなわち北極圏に居住していたケルトにも役割があった。彼らは闇をつかさどる特異技術をもっていたのだが自分達の役割にたえられずに南下して来ていた。この特異技術は死者に関わることなのだ。だがドルイド教の魔術として微妙ながらも現在に伝えられている。火葬もその技術の内の一つである。

伏犠と女媧が彼らに夢通信技術を伝授したのは闇の民とはいえれつきとしたアトランティス文明の一翼を担う人々であったからである。ところが彼らは洪水経験を持つ光の民ではない。彼らの神話には洪水伝説はおろか創造伝説すらない。中国の洪水や創造の伝説が極めて土木技術的なのも伏犠と女媧によってつくられた文明であるからだがケルトの場合は技術的であるよりは自然神的、呪術的である。これは出自が闇の民であることと無縁ではあるまい。ところで伏犠と女媧は夫婦ではないが西ヨーロッパで彼らは不義の子をもうけたらしい。アイルランド神話がこのことを伝えている。女媧はアイルランドではダーナと呼ばれている。彼女はエクネという息子を生んだがその子の父の名は伝わっていない。エクネが正規の夫婦の子ではないことを示している。エクネは「母がダーナであるところの神」

といわれたが彼は「光」と「知識」の力を備えていたから神と呼ばれた。彼の子孫はダーナの人々といわれアイルランドでは特別尊敬されている。ダーナは「天上」から「魔の雲」に乗ってやって来たがこのときは伏犠は同行していなかったのか一切伝えられていない。ダーナの女媧は息子エクネだけを連れてやって来たのであろう。ということは伏犠はカルナックに留まり女媧だけが乳児だった息子と南イングランドにやって来て「光」と「知識」を伝えたことになる。彼女は「運命の石」を持って来た。この石は上に王たるべき人が立った時だけ吠え唸る。その声によって正しい王国の建設を人々は確認しえた。この石は現在でも「戴冠石」としてウエストミンスター・アベイに存在する。ただしこれは一二九七年エドワード一世がアイルランドからイングランドに移したからであるがもともと女媧であ

るダーナが南イングランド地方にこの石をもたらしたのはいうまでもあるまい。息子エクネの王位を証明するものだったからである。後になってエクネの子孫がこの石を持ってアイルランドに移っていった。さて西ヨーロッパの巨石を修築しそこにいた闇の民族ケルトに「光」と「知識」を伝え伏犠と女媧は日本に帰り四国の足摺岬にやって来る。ここの巨石を修築整備することが最後の任務であった。日本の巨石装置は世界のひな型としてつくられていたがここ足摺岬には西ヨーロッパ、カルナックと南イングランドの巨石を一つにした唐人駄場がつくられていた。しかし伏犠と女媧がやって来た頃は見る影もなく荒れ果て壊れていた。度重なる地震がその原因であった。二人は唐人駄場を修築するのにカルナックと南イングランドの巨石、すなわち直列巨石とアヴェヴェエリーのストーンサークルを参考とした。

女媧がエジプトを出発する時足摺の修築も命じられていたがどんな方法でそれを実行するかはプントでの会議で決定されることになっていた。というのも世界各地の状況を正確に把握しているのはセクターであるプントにおいてはなかったからである。伏羲と女媧が足摺にやってきてプントすなわちアトランティスの洪水の模様を伝えていたのか、それともそれ以前にすでに伝えられていたのかははっきりしないが香川県三豊郡高瀬町の伝説に世界大洪水を思わせるものがある。高瀬町近辺にも人々が増え争いが絶えなくなったらついに海神が怒ってしまった。「お前達の生命を保つために必要な塩を与えているのに何故いつまでも醜い争いを続けるのか」といつて里中に海水をみたそうとした。海水がひたひたと増して来るにつれて里人達は先を争って山に登った。このとき海神が西の海の彼方から飛ん

できて鬼ヶ白の山頂に降りた。ここで海神は白をつくり悪い心の人を片っ端から捉え白でひき殺してしまった。これが七八日続いたためあたりの海水は真っ赤に染まってしまった。この伝説では人は海水に溺れ死ぬのではないがインドネシアなどの大太平洋の民族には海水が山頂まで上がってきて山頂に避難した人々もついに海水にのみ込まれてしまうという伝説が広くみられる。香川県のこの伝説も大平洋の洪水伝説に近い。それと海神が怒って里人を殺すのはアトランティスの海神ポセイドンが人々の欲望の醜さを憎み一夜にして島を海没させてしまうのと似ている。アトランティス伝説が日本に伝えられるまでに相当変容してしまっ

てはいるが海水が山頂まで上がって来ること、海神が怒って人々を死に至らしめるのは同じ構図である。この変容の大きさはアトランティスからの距離に比例するであろう。西ヨーロッパで最も古い民族、ケルトに洪水伝説がないのは彼らの居住地大西洋沿岸の近くにアトランティスがなかったあきらかな証拠であろう。要するにアトランティスが大西洋になかったのである。

## インダスの人々

ハトシェプスト女王によってプントに派遣された魔女五人にはそれぞれアトランティス一〇国のうち二国を担当するように命じられていた。女媧は東アジアと西ヨーロッパであるが、中央と西アジアを担当する魔女は北米大陸の中央と東部をも担当しなければならなかった。地球結晶図で肺と肝に対

するつぼが分布する地域でともに五行では金とされる領域である。ここを担当した魔女は古代メキシコではトナカシワトルと呼ばれる女神である。彼女はプントでペアとされた両地域の男性はこれも古代メキシコではトナカテクトリと呼ばれた男神でこのペアは正式の夫婦となってメキシコ文明の創始者となった。ただし夫神トナカテクトリはメキシコ人ではなくインダス人である。このペアもプント会議ではインダスの修築、再整備が求められそこにまずおもむいた。しかし、ここでは彼ら二人ではどうしようもない事態が待ち受けていた。インダスでもBC二〇〇〇年頃から衰退期に入りモヘンジョダロやハラッパーといった都市は彼らの時代BC一五〇〇年頃には荒廃してはいた。しかし市民がそれなりに居住してはいた。インダス文明の衰退にも北方からの蛮族の侵攻が拍車をかけていたとはい

え、この場合は別の理由もあった。インダス河の度重なる氾濫とそれによって破壊された都市の修築のために多量のレンガを必要とし、これを焼くために森林が乱伐され国土が荒廃してしまったことが特に大きな原因となっていた。それでもモヘンジョダロにもハラップにも市民は居住し生活を営んでいた。トナカテクトリがエジプトの魔女であり妻となったトナカシワトルとインダスを訪れた直前に北方から侵攻してきていたアーリア民族に突然襲撃されたモヘンジョダロは市民が惨殺され、家財は掠奪、建物は放火され滅亡してしまっていた。ハラップもほぼ似た情景を呈していた。またインダスが駄目でも同一地域であるメソポタミアの再整備の必要もあったがここはハムラビ王の死後急速におとろえ、BC一五〇〇年時点ではカッシト族という文化レベルの低い山岳民族の支配下にあっ

てこの再整備も望み薄であった。二人はこの地域での再整備はあきらめメキシコに向かった。このとき相当数のインダス人を伴ったがはつきりしたことは伝えられていない。彼らが目指したのはユカタン半島の付け根ベチエ湾岸ラ・ヴェンタである。この当時のメキシコはともろこしの高度農耕文化段階に入っていて高度文明を形成できる準備は充分できていた。そこにエジプトとインダス文明を身につけた夫婦がやってきたのだから乾いた大地に慈雨がしみ込むに似てまたたく間にこの地に夢通信網が整備されたのはいうまでもない。ピラミッドもつくられたし、巨石装置も方々につくられた。しかし、この地を本格的に文明化したのは二人の子、四人の男子のうちの子三男ケツアルコアトルであった。彼は「羽毛の蛇」といわれた。彼は西からやってきて西に去ったともいわれるがそれは両親が西の

彼方からやってきた異人夫婦だったからではあるまいか。トナカテクトリとトナカシワトル、更にはその子のケツアルコアトルがつくった文化はオルメカと呼ばれるがこのオルメカには頭にターバンを巻いて子供を抱いている女神像がある。このことはこの地にインダス人が相当多数でやってきて居住し文化文明をつくりあげたことを示しているに違いない。この女神像はBC一二〇〇年代のものときれている。さて古代メキシコからの先住民であるナファ族は『旧約聖書』と瓜二つの洪水伝説を残している。大雨がふりやまず地上に大洪水が起こって高い山も水底に沈んでしまった。たいていの人間は溺れ死んでしまったが男ナタと女ネナの夫婦だけはチトラカファン神から大杉で船をこしらえ逃げよと忠告され生き残った。二人は洪水に船を浮べ戸を固くしめ水が入って来

ることを防いでいる間にただひたすらともろこしの穂を食べ続けていたがいままでも波に揺られていた船が少しも動かなくなった。二人は怪んで戸を開いてみるといつの間にか洪水はひいてしまつて、残りの浅い水に沢山の魚が泳ぎ回っていた。二人は大喜びで魚をとらえて木を擦り合わせ火をつくりあぶつてその魚を食べた。この二人が人間の始祖となった。素材ではあるが『旧約聖書』のノアの方舟に酷似した神話ではある。この洪水神話はメソポタミア起源であり、インダス人によってメキシコに持ち込まれたであろう。いずれにしても地球結晶図(図5-6)の②と④の地域が五行上金をあらわす共通性をもっていることはこの洪水伝説の共通性からも充分うかがうことができる。

## トロイ戦争の真相

女媧とトナカシワトル以外の魔女もそれぞれ担当の地域を訪れ夢通信装置の再整備や新設、整備を行ったのはいうまでもない。南米ペルーのインカに行った魔女はチャビン文化をつくりあげるのだがピラミッドや巨石を新設したのはわざわざことあげるまでもあるまい。この魔女はペルーのある南米大陸と南大西洋の正五角形⑨と同じ「土」である⑦の正五角形のオーストラリアにも行った。ペルーとオーストラリアにはよく似た洪水伝説がある。ペルーのは洪水で生き残った二人の兄弟が鳥の乙女と結婚して子孫を残したと

いうものである。オーストラリアのは洪水で生き残ったのは男二人と女一人であるがペリカンが生き残った女と結婚したかったが失敗し女は男二人のもとに逃げ帰るという話である。両伝説で共通するのは男二人、女一人、鳥との結婚であり筋立ては違うが要素が共通するから両伝説の起源が同じことを示している。エジプトの魔女が両地域にもたらしたのであろう。さてハトシェプストの時代より二二〇年以上経ったBC一二八五年にトルコのアナトリアを支配した巨大帝国ヒッタイトとエジプトが現在のレバノンのカデシユで会戦しエジプトの方が敗北しラムセス二世はエジプトに逃げ帰る事件が起こる。ヒッタイトもBC二〇〇〇年頃にロシアから南下した蛮族アーリア民族であったが彼らが征服した原ハツティの高度文化を忠実に学び引き継いだらしくこの地の夢通信装置を荒すこともなく

寧ろ積極的活用した気配が濃厚である。ネムルート山やその周囲に散在する巨石遺跡が今もってそれほど破壊されていないことから想像できる。しかしこのヒッタイトも一二〇〇年頃になって滅亡しそれ以後のヒッタイト民族自体の行方は杳として知れない。ヒッタイトの最後の戦いと思えるのがギリシャのミケーネと一〇年も続いたトロイ戦争である。トロイの王子パリスがギリシャのスパルタを訪れ歓待されたのに絶世の美女スパルタ王妃ヘレネーに懸想し奪ったばかりではなく財宝すら盗んでトロイに帰ってしまった。ヘレネーと財宝の返還を求めてひき起こされたのがこの戦争だった。実はトロイへの帰途パリスとヘレネーは嵐にあいエジプトに漂着してしまいヘレネーも財宝もエジプトに留め置かれパリスだけがトロイに帰されたがギリシャはトロイの言分を信じなかった。そのあげくの果

ての一〇年戦争だったとギリシャの歴史家ヘロドトスは書いている。すでにふれたとおりトロイ戦争が単にヘレネーと財宝の返還の為にけに行われたのではあるまい。ヘレネーも財宝も実はトロイが欲しかったのではあるまいか。ヘレネーはギリシャの最高神ゼウスと大地母神レトとの娘であるというから魔女だった。ホメロスはヘレネーはエジプトの女からもらった秘薬をもっていたと書いているが彼女はエジプト渡りの魔術を心得ていたばかりではなく最高技術に達していたに違いない。それ故にゼウスとレトの娘といわれたのだろう。パリスがスパルタから盗んだ財宝も単なる金銀宝玉ではなく魔術の道具だった。スパルタ王はミケネ王の弟であるがこの当時ミケネ文化は最高潮に達していたシミケネは美しい山々に囲まれた高台にあるが調査したところ夢通信装置が配置されていた気配はない。

アテネのあるギリシャ本土は夢通信網の痕跡は確かめられなかったがミケネやスパルタのあるペロポネス半島にもそれはなかった。ミケネやスパルタも夢通信網がほしかったのであろう。ヘレネは夢通信の最高級技術者でありそれに相応しい道具を持っていた。パリスがそれを奪ったのもパリス一人の意志ではなくトロイ王家の意志であつたのではないか。ミケネ、スパルタにとつてもヘレネー、財宝は何よりも貴重だつた。一〇年戦争はその争奪戦だつた。ヒツタイトも夢通信技術を原ハツテイから引き継ぎ更に発展させたのは確実である。しかし衰えたヒツタイトには優秀な魔女もいなくなり当然道具も無くなつていた。ヘレネーと財宝は本来はトロイ王家が持つべきものであつたかもしれない。BC一二八五年にエジプトに勝利したヒツタイトではあるがもともとヒツタイトはエジプトと友好関

係にあり夢通信技術に関してもエジプトの助力があつたろう。エジプトもヒツタイトには好意を抱いていた。エジプト王妃が夫の死後ヒツタイト王子を婿に欲しいと願ひ出たがその王子がヒツタイトに向う途中に殺害されてしまい女王の望みは果たせなかつたこともあつたぐらいエジプトとヒツタイトの関係は親密であつた。又エジプト王妃になつたヒツタイト王妃もいる。ヒツタイトにカデシュの戦で敗北したラムセス二世の妃がさうであり敗戦後ヒツタイト王をなだめる為王女を妃として迎えたというわけである。それよりもホメロスの「イリアス」と「オデッセイ」を読んでいるとギリシャの神々こそ夢通信の魔術師、魔女だつたことがよくわかる。ギリシャに夢通信網の痕跡がないのに不思議な事ではある。エジプトの神が不死であること以外は人間と何ら変わらないのも不死は浦島太郎の

三〇〇才の長寿と同じことなのではないか。

## 『死者の書』に沿つて

エジプトでは死体をミイラにして冥界でも永生出来るよう願つた。死者にはパピルスの『死者の書』を巻き付けて冥界での幸福を祈つた。ピラミッド建造などの高度な科学技術を誇つたエジプトの人々にしては『死者の書』はまるで子供だましの絵本にすぎない。このモノの技術と文の内容の異常なレベル差はどうしたのであろうか。『死者の書』に描かれている霊界(冥界)もこの世とほとんど変わらない。ただしここは理想郷であつてかつてのエジプト人の原郷を

描いていると思えてならない。アトランティス文明の姿をそのまま『死者の書』は伝えているに違ひない。そう思つてよく読むと世界を一〇〜一四の地域に分割してあつて地域ごとにそれぞれ特徴をもつている。これも地球結晶図の分割と酷似している。また『死者の書』は魔術書であるといわれ、そのまま魔術師(夢通信技術者)の夢通信報告書でもある。従つてこの書をユング学による夢判断をすればアトランティスの地球医療の詳細の実体が浮かびあがつて来るはずである。そこでイギリスのエジプト学者ウオリス・バッジの『死者の書』を今村光一が抄訳した『世界最古の原典 エジプト死者の書』(たま出版、一九九四年)をテキストとしてアトランティス世界を描いてみたい。この書はBC五〇〇〇から四〇〇〇年の間に生存していたアニという書紀が霊界を訪れた体験談なのだという。アニ



の霊界物語なのだ。アニとは古代エジプトのスウェーデンボルグだったというわけである。この書を一読して夢通信報告書に思えるのも霊界から帰還した人物の『霊界日記』であるからなのだろう。今村は訳注でアニはBC五〇〇〇から四〇〇〇年の間に生存していたというが矢島文夫『死者の書』（社会思想社、一九八六年）ではバツジが使用した「アニのパピルス」はBC一五〇〇年から一四〇〇年間に作製されたと書いている。それならばハトシェプスト女王のプリント遣使後のことでありアニはプリントへの遣使のうち例えば帰還した魔女からでも聞いたアトランテイス知識が記されているとも考えられないことはない。（アトランテイスである）プリントについての記述もバツジの『死者の書』にはあり、そう考えられないこともないがここでは今村の訳注に従いこの書はBC五〇〇〇から四〇〇〇年

に成立したものと考えたい。バツジの『死者の書』そのものが「アニのパピルス」を中心に編まれてはいるがエジプト古代遺跡出土の墓石や石棺の碑文字として刻まれた沢山の絵文字の文献を解読したのもも加えているとこのことであるからアニの生存年代や「アニのパピルス」の製作年代にこだわることとはないのかもしれない。この書には霊界に洪水や島の海没のことは全く記されていない。多分海没以前の繁栄していた頃の最盛期アトランテイスがここでは語られているのではないか。ともあれここでは『死者の書』の記述に沿ってアトランテイス世界の様相と夢通信文化の実相について述べてみたい。勿論この書の霊界がアトランテイス世界の比喩即ちアトランテイスが霊界に見立てられていると考えられるからである。

## 新しい世界への入口、

### アトランテイスへの出

#### 港

アニは死んだ後死体を捨てて靈魂となつて「死の河」をわたりあの世に到着し先に霊界の住民となつていた妻を迎えられる。アニは妻ススにともなわれオシリスの住居に行きマアトトという審判神の部屋で「審判」を受ける。ここで心臓が計られ「マアトトの羽毛」よりも軽かったので合格し霊界の正式住人となる。この場合のこの世とはエジプトのことであり霊界への旅人はアトランテイスへと旅立

とうとしているエジプト人のことである。旅人の名はアニであつていい。彼は紅海沿岸のエジプトの港をでて「死の河」に見立てられている紅海をわたる。到着したのはチグリス・ユーフラテス河々口の港であろう。ここで彼は「審判」を受ける必要があつた。旅人アニはアトランテイス（プリント）に入るには紅海を南下しアラビア半島をぐるりとまわつてペルシア湾に入り北上しこの港でアトランテイス渡航許可証を受け取らなければならなかつた。この港でのアトランテイス入国資格審査は厳重を極めた。理想郷アトランテイスへ入国出来るのは業績も卓越し徳性高い限られた人々だけであつたからである。旅人に少しでも俗臭が認められたら入国許可証は与えられなかつた。アニにとつて霊界への案内者は妻ススであるが現実の旅人にとつてアトランテイスへの案内人はチグリス・ユーフラテス河

口の港で待っている専門家であった。靈界の「審判」所は「オシリスの住居」の中の「マアトトの部屋」であるがオシリスは靈界の主であるからオシリスに相当するアトランティス王はチギリス・ユーフラテス河口即ちメソポタミアの港の近くには居住していない。「オシリスの住居」とはアトランティス王の離宮だった。この離宮の一部に「審判の部屋」即ち資格審査所があったというわけである。これに合格してはじめて旅人はアトランティス（ブント）を目指して出航出来た。旅人はこの港まで乗って来た船はアント船といたがそれはこの港で乗り換えアトランティスへはアアテト船に乗って行くことになる。靈界ではラア（太陽神）が東天から中天まではアアテト船に乗って天空を航行し中天から西天に没するまではアント船に乗り換えて航行する。この太陽船は本物の太陽船の模倣船であつ

たから一般の靈も乗ることが許され天界へ行くことが出来た。アトランティス世界ではアトランティス平野や市（これぞブント）こそ特別の区域であり王が居住する王宮のある場所なのは後に詳しく述べるがここで必要なのはとりあえずメソポタミアの港を乗換港としてエジプト、アトランティス航路は成立していたということである。ここでアトランティス世界の構造について述べてみる。その為には靈界の構造を知っておく必要がある。靈界のみはらかす平原の東西南北の四ヶ所にはシュウ（方角のこと）の柱が天高くそびえ各柱はそれぞれ四人の神によって守られている。ラアは前述したとおり天空を東から西にアアテト船とアント船に乗って航行する。ラアは靈界の大王でありオシリスは王なのだが大王ラアの航行には当然、男神トトと女神マアトトが左右に侍っている。靈界では神々は天空に

住んでいるがラアだけは一般の靈と同じく地上に住み天界に昇って又地上に帰って来ることを繰り返している。ここまでのことをアトランティス世界に置き換えるとどうなるのか。靈界の「みはるかす平原」とは地球結晶図として描かれた世界全体と考えていい。東西南北の四ヶ所の柱のうち東がイースター島のモアイといたいところだがそうはならず南太平洋の海中、西はエジプトのギザのピラミッドである。海中の地点はスラウエシ東南三〇度、ギザは西北三〇度の方角にあり共にスラウエシから一万キロの等距離にある。この場合東西は必ずしもアトランティス（ブント）の真東と真西を指すのではない。神々は天空に住む。ブントであるスラウエシはアトランティス世界ではアトランティス平野や市でありここが靈界の天空にたとえられる。神々はアトランティス市民のことである。ラアは

アトランティス大王であり彼は定期的に御苦労にも世界を巡回し全世界の実状を視察しなければならなかった。後世中国の秦の始皇帝が広大な帝国を定期的に巡回することを自分の義務としたのと同じである。こうなるとラア即ち大王の巡回は東はイースター島（海上とはいかないので）から西はエジプトまでであり船を乗り換えるのはアトランティス港ということになる。かつてイースター島とアトランティスに密接な交渉があったことが島の伝説でわかる。巨人ウオケが怒って陸地を根絶するため自分の長杖で陸地を持ち上げ振り落として海に沈めてしまった。残ったのはイースター島だけだったとイースター島民は伝えている。しかし地質学的にはイースター島などのポリネシアには人類が地球上に出現して以来陸地が海に沈んだ現象がないことが証明されている。この伝説はアトランティスの

海没を伝え聞いた島民が自分達のこととして伝説化しているのである。巨人ウオケとはポセイダンのことであろう。『死者の書』を読んでいるとラアの船即ち太陽船は一般の霊にもまねられ霊界行きに使用されたらしいからアトランテ

イス世界でも大王の巡回船をまねて一般の旅人用に「太陽船」がつけられ利用されたのに違いない。

霊界にあっても北は不吉な方向であり死者の国への入口にある「アテメントの入江」は霊界の北にある。地球結晶図の北極圏が「死者の国」にあたりアテメントの入江とは北極海沿岸のことである。ただし霊界の北方には「青き湖」があつて霊が危難にあつたとき身を清める清めの池、霊泉でもある。

これは(図5-6)の②と③の境界線上にあるバイカル湖のことを指すであろう。バイカル湖は天使である白鳥たちの湖、まさに聖なる水域である。アトランテイス世界

でも白鳥の湖バイカル湖は神秘の湖として尊重されたのである。

## 第7章その1

了